



テッポウユリ

107 編は 106 編の 1 節に鍵括弧をつけて「恵み深い主に感謝せよ／慈しみはとこしえに」と(1) と繰り返して記していますので、106 編を踏襲し、新たな思いで賛美した詩編です。

106 編では民自らの罪を取り上げていますが、107 編では苦しめる者の手から彼らを贖い(2) と、敵を 苦しめる者 とし、自らを 彼ら とし、対比させながら、主に贖われた と苦しみに勝利した喜びを歌っています。この対比を、詩文の形式にも取り入れ、技巧的な形式美を伴った賛歌となっています。

序章に続き、本編は 4 つの章で 苦しめる者 と 彼ら を対比させ、続いてテーマが二つ入ります。テーマの言葉 A: 苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと／主は彼らを苦しみから救ってくださった(6) テーマの言葉 B: 主に感謝せよ。主は慈しみ深く／人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる(8) が入り、各章ごとに繰り返えされて、シュプレヒコールのように盛り上がりを見せています。

	苦しめる者	彼ら
1 章	荒れ野、砂漠	道に迷い、見失う。飢え、渇き、魂は衰え果てた。
2 章	闇、死の陰、貧苦、鉄の枷	捕らわれ人となり、労苦があり、倒れても助ける者はない。
3 章	無知、背信、罪	屈従する身となり、死の門に近づいた。
4 章	海、大海、商い、嵐	上昇、下降が激しく、魂は溶け、よろめき、揺らぐ。

1章での苦難は生きる場を得られない貧しい、流浪の苦しみでしょう。それに対し、主は渇いた魂を飽かせ／飢えた魂を良いもので満たしてくださった。(9)

2章での苦難は故事の奴隷や捕囚に等しい、奴隷のような束縛の苦しみでしょう。それに対し、主は青銅の扉を破り／鉄のかんぬきを砕いてくださった。(16)

3章での苦難は信仰を忘れ、人を大切にせず、理性的に行動しない苦しみでしょう。それに対し、主は御言葉を遣わして彼らを癒し／破滅から彼らを救い出された。(20)

4章での苦難は混沌の中から、何らかの利得を得ようとして欲望に左右される苦しみでしょう。主は嵐に働きかけて沈黙させられたので／波はおさまった。(29) と、助け主なる主の働きは、まさに、主イエスの姿を彷彿とさせる、愛と力に溢れるものです。

最終章では 苦しめる者 、即ち、驕る者、悪事をする者に対する主の裁き、報復を述べています。また、 彼ら 、即ち、飢え、乏しい人に対しては、祝福、救いを告げています。 彼ら は、東から西から、北から南から(3) 集められ、羊の群れのような大家族とされた(41) とあります。

『讚美歌 21』は 84「聖なる神よ」 <http://www.its.rgr.jp/data/sanbika21/Lyric/21-084.htm> を関連讚美歌の一つとしてあげています。この讚美歌は 5 世紀のコンスタンティノポリス典礼に取り入れられ、西方教会へ、そして受難日礼拝で用いられた讚美歌とされています。

ジュネーブ詩編歌はオルガンとビオラ・ダ・ガンバによる重奏です。

<https://www.youtube.com/watch?v=b6z7huvHm3M&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=107>